

# ***KEN KEN***

*OPU Architectural review 2022*

*vol.1*

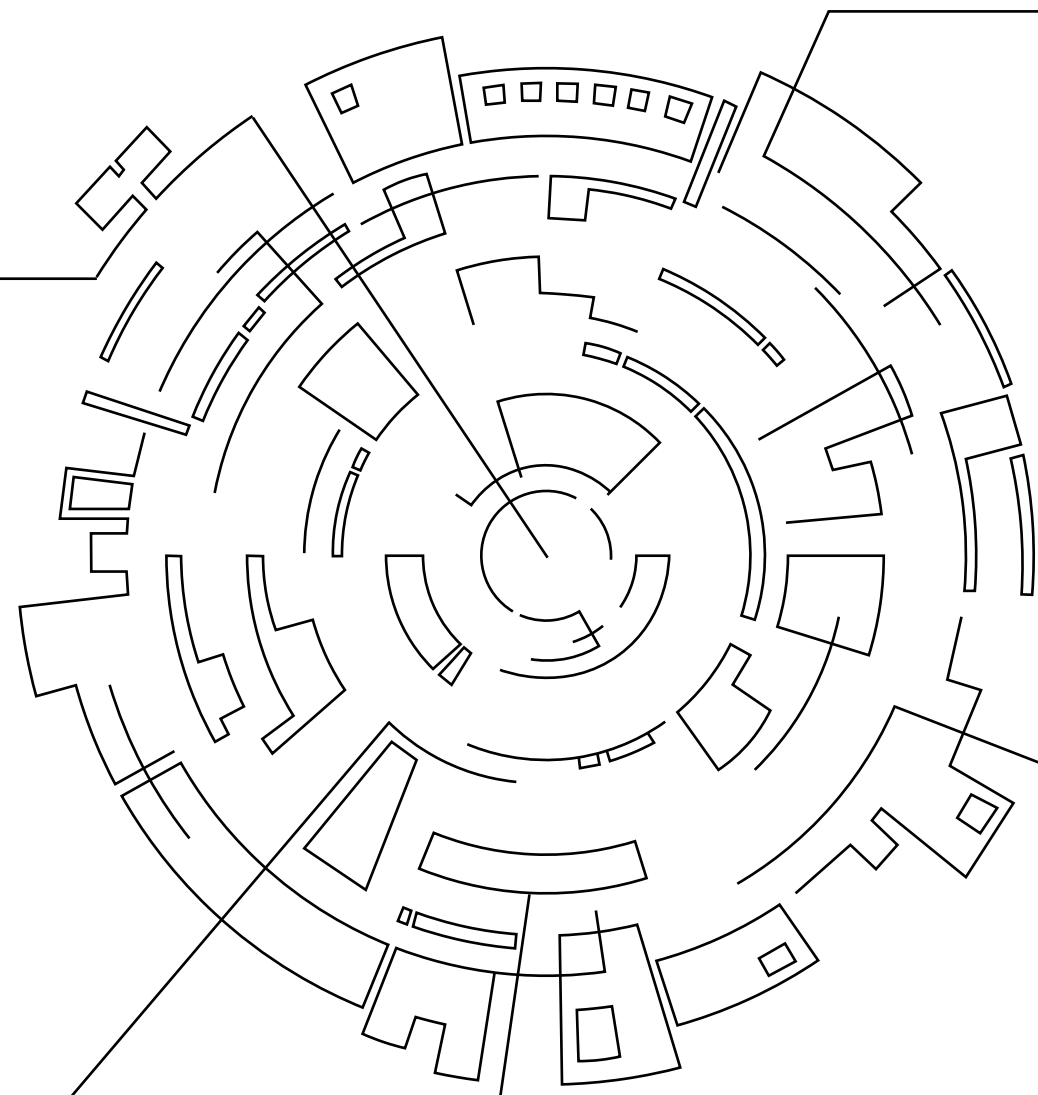
*KEN KEN  
vol.1*

*OPU Architectural review 2022*

*2021*

*2022*

*OPU Architectural review 2022*



# 2022 | Record

音は空気を振動させ、波となって耳に伝わる  
その振動（波）を音溝と呼ばれる溝に置き換え  
記録したものがレコードである

私たち建築サロンは昨年度誕生し、活動を始めたばかり  
つまり、溝が彫られていない、音を持たないレコード同様である

今年度はそのまっさらなレコードを作成し  
新たな溝を掘り始める

今後行うさまざまな活動は  
文字という溝に置き換えられ、刻み込まれていく  
何年後、何十年後、  
素敵なメロディーを奏でるレコードになることを願って

● ●  
県大建築学科

# KEN KEN

## contents

---

1. 教員紹介	04
2. 学生生活・設計課題	06
3. 卒業制作・修士作品	14
4. 建築サロン	26
5. 講評会	28
6. おわりに	30

# 十人の師

建築学科が誇る個性豊かな



津田 勢太

建築構造  
豊島美術館 / 西沢立衛



吉田 豊

建築設計 / 建築意匠 / 建築史 (近代西洋)  
ソーク研究所 / ルイス・カーン



西川 博美

建築設計 / 都市史 / 保存・再生 / まちづくり  
Nhà Thờ Phát Diệm / Trần Lục



岡北 一孝

西洋建築史 / 建築の保存・再生  
サンタ・マリーア・デッラ・パーチェ聖堂の回廊 / プラマンテ



河合 大介

美学 / 美術史  
ユダヤ博物館 / ダニエル・リベスキンド



福濱 嘉宏

日本建築史 / 建築構法計画  
ストックホルム市庁舎 / ラグナル・エストベリ



向山 徹

建築設計 / 建築歴史・意匠 / 建築計画  
クライストチャーチ / エリエール・サーリネン



畠 和宏

建築計画 / 建築設計  
竹林寺納骨堂 / 堀部安嗣



穂苅 耕介

都市・地域の安全・再編 / まちづくり  
長野市立博物館 / 宮本忠長



原田 和典

建築環境工学 / 建築音響  
熊本県立劇場 / 前川國男

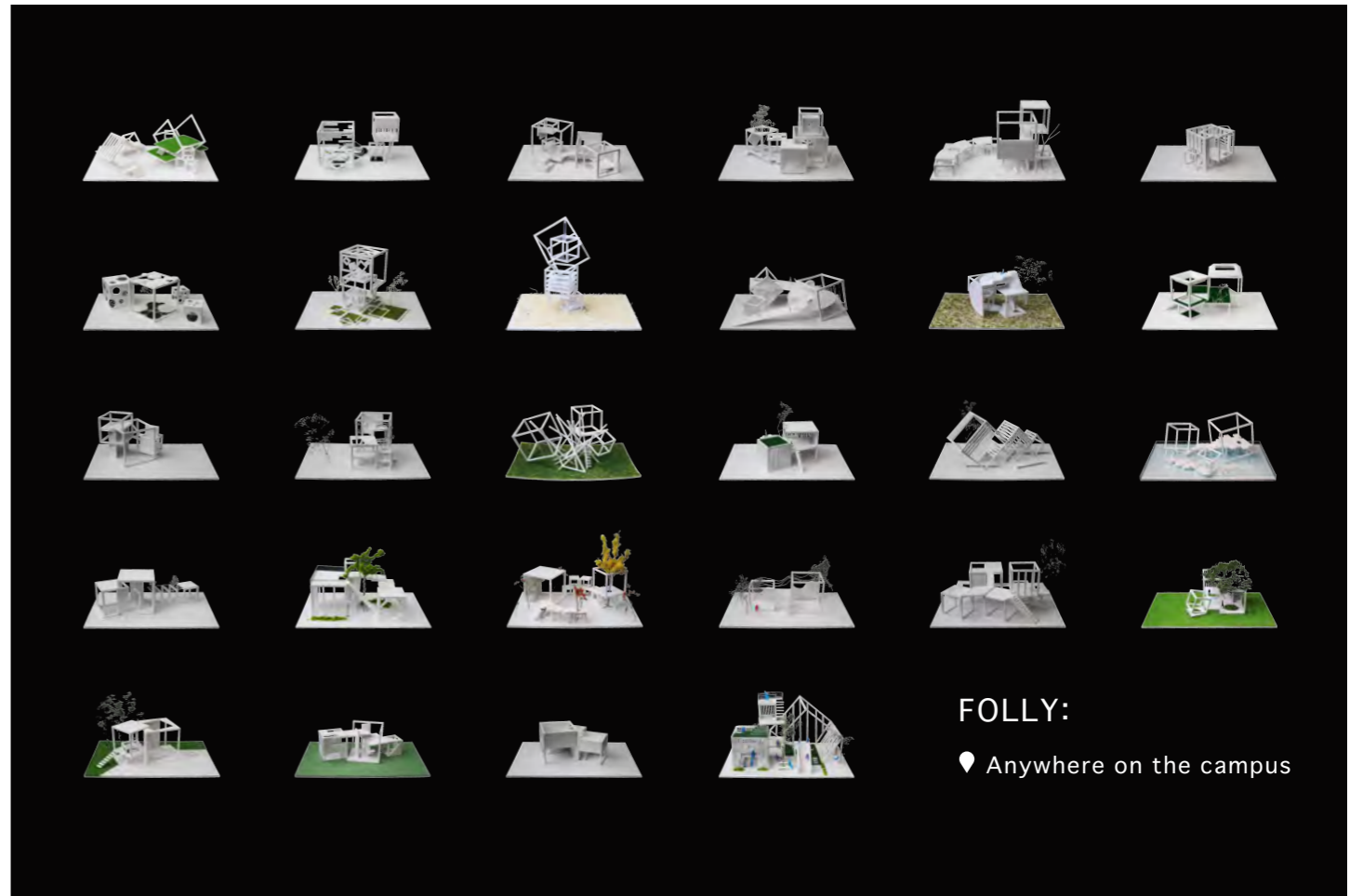
座右の銘  
名前  
研究分野  
好きな建築





# 6.0 × 4.5 × 3.0

6m × 6m × 6m : 1、4.5m × 4.5m × 4.5m : 1、3m × 3m × 3m : 1 の立方格子を自由に配置する。

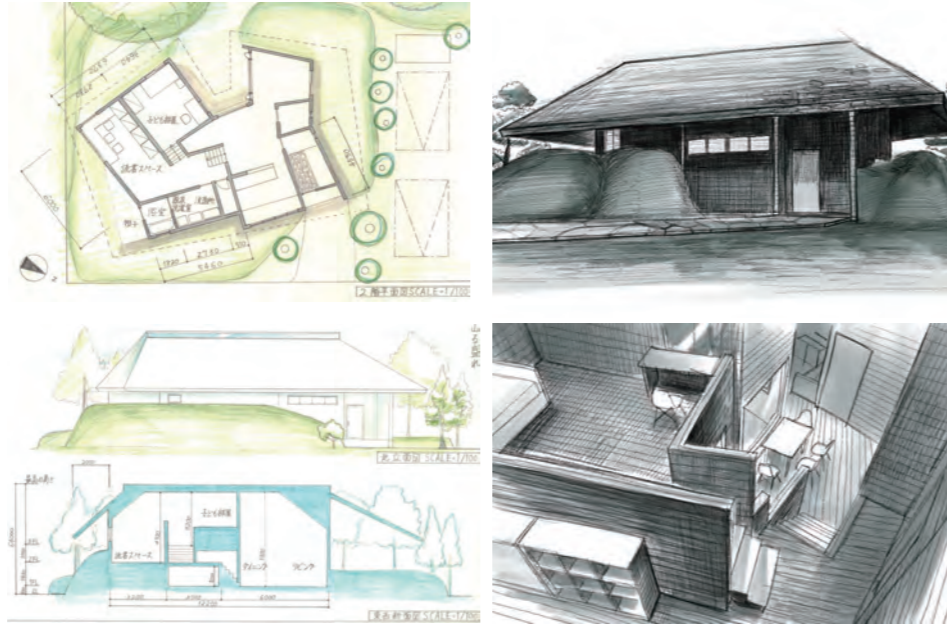




## エダ -House

太田 実里 / Minori Ota

ダイニングを中心にそれぞれの生活空間が広がっていく住宅を設計した。家族構成は、父、母、娘の3人家族を設定した。大きな空間を作りながらも、一つ一つのまとまりごとにずらしたことで直接視線が当たらないようにした。また、空間を壁で区切らないことでリビングからダイニングにかけて大きな吹き抜けの空間を作ったことで開放的な場所になるようにした。個人の部屋は段差をつけ、ずらすことで緩やかに各部屋と繋がるようにした。同じ空間で過ごす感覚を音で感じて欲しいと思いこのような設計を考えた。



## 自然に寄り添う住宅

橋本 七海 / Nanami Hashimoto

想定した家族はガーデニングと読書を趣味とする夫婦で、趣味に没頭できる住宅の形を模索した。敷地の西側に盛り土と樺や楷の木があり、木漏れ日を楽しむことができる環境であったことから全体のテーマを「自然に寄り添う住宅」として計画し、趣味に没頭できる空間づくり・自然を享受する空間づくり・快適な生活を実現する構成・周辺に溶け込む外観の4点を意識してデザインした。趣味を楽しむ空間としての庭は、住宅を敷地に対して、角度を振り配置してできたスペースで、読書のためのスペースであるリビング・ダイニングに本棚兼ベンチを置いて、開放的な2つのスペースに対して読書に集中できるように小さな読書スペースを設けている。

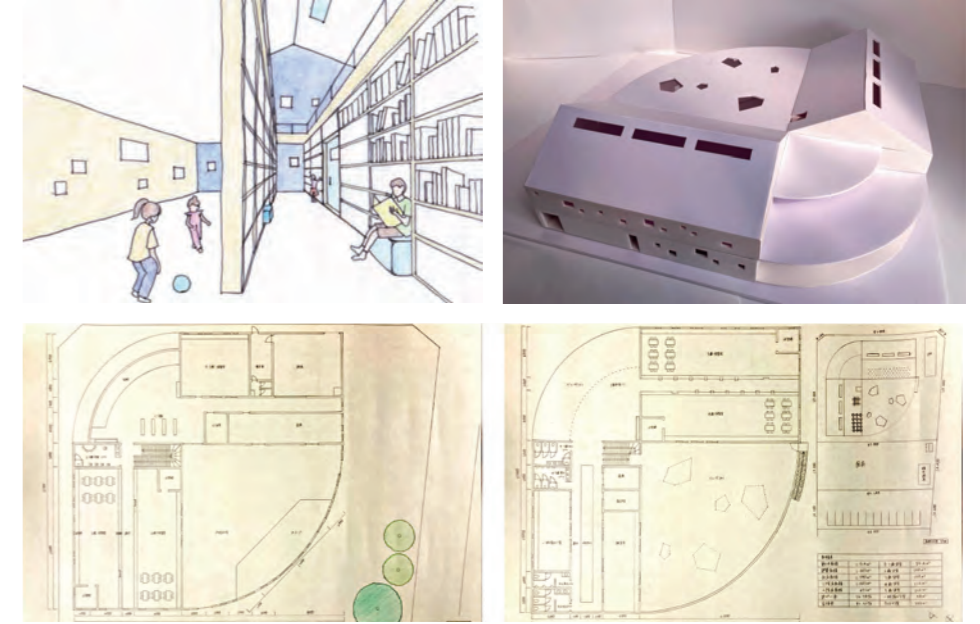


自分の考える家族像を想定し、家族の生活が豊かになるような住宅の設計。周辺環境との関係から導かれる居住空間（方角・高低差・樹木・前面道路・隣接建物）、構造を意識した設計手法（木造軸組構造）、建築の支える空間（設備スペース・水回り・収納スペース）の基礎的知識と図面表現、支えられる空間（リビングルーム・ダイニングルーム・個室）空間設計、上記を統合する全体配置計画と建築のかたち

## はぐくみ保育園

重岡 咲子 / Sakiko Shigeoka

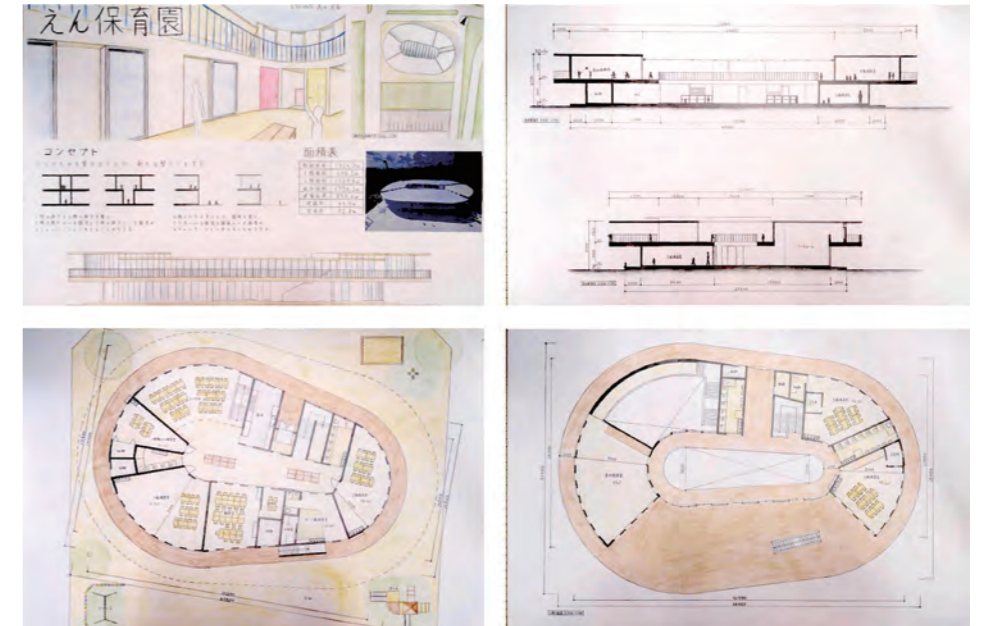
この保育園の特徴は屋上の大きなベランダと屋根に設置した遊具、廊下の両サイドに設けた本棚、建物全体にランダムに設けた開口の3点。タイトルにもある通り、さまざまな能力を育むことのできる保育園を目指して設計した。屋上を広く設け、屋根の傾斜を利用して遊具を設置することで、狭い敷地でも遊ぶ場所をたくさん確保できるだけでなく、腕力や持久力などを育める。さらに、日常的に本を読むことで、集中力や想像力などを育めると考えた。また、ランダムに設けた開口は見た目楽しいだけでなく、大小さまざまな光が差し込むことで光への興味を掻き立てたり、時間によって色んな居場所ができたりすることを期待した。



## えん保育園

高田 実希 / Miki Takata

近所の幼稚園に通う子供たちが同じところをぐるぐる走り回っている様子を見て、幼稚園の内外あちこちにぐるぐる回れる空間を設け、天候・場所問わず子供たちが走り回れるようにしました。2階に一周ぐるりとベランダを設けることで保育園の近くを通る大学生や地域のひとと、1階を吹き抜けにして2階全体を見渡せるようにすることで各階にいる人が、大きなテラスを園庭に向かって開くことで園庭にいる子供たちとテラスにいる子供たちが、それぞれコミュニケーションを取ることができるようにあちこちに開いた空間を多く設置しました。地域に、さまざまな人に囲まれ接しながら子供たちが成長できる、そんな保育園になるように設計しました。

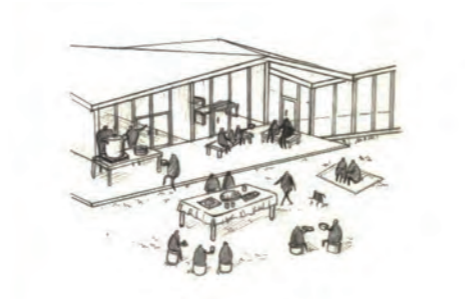




## 輪で繋がる防災センター

荻田 歩花 / Honoka Ogita

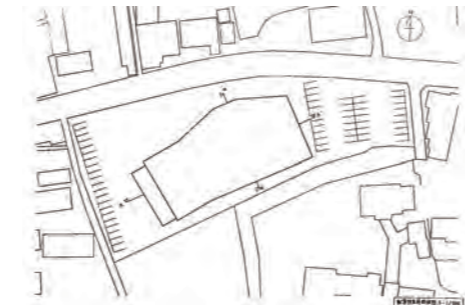
災害に強いまちをつくるためには防災設備が整備されていることと同時に、地域の人々がお互いに助け合える関係になることが大事だと考えた。お互い助け合うためには交流が必要だと思い、自然とコミュニケーションを取りやすい空間づくりを目指した。部屋を輪のように繋げて回遊性をもたせることで建物の中にいる人同士が隔たりなく歩き回るようになり、知らない人でもお互いの姿を目にする機会が多くなるようにした。また、防災センターにプラスアルファの機能としてアトリエを設置した。このアトリエでは災害時に役立つものを普段から作っておくことができ、災害に対する準備を地域の人と行えるようにした。



## 待合所

五味 美月 / Mizuki Gomi

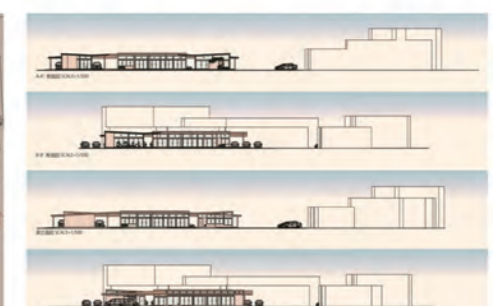
敷地周辺は小学校、駅、病院などがあり、さまざまな世代の人々が利用する場所である。そこで、コンセプトを待合所とし、友達との待ち合わせ、電車の待ち時間、病院の待ち時間などのさまざまな用途に利用することのできる施設として今回の防災交流センターを設計した。タイトルの街会所は、街の人々が会う場としての待合所という意味をこめている。建物は分棟にすることで、総社宮側の風景や裏にある公園に視界を抜けさせ安全に利用できるようにした。自習室やラウンジ空間をガラス張りにし、開放的にした。外の階段空間やベンチなどは24時間使用することができる。また、施設内には既存の施設にあった学童保育も設けた。



## アートと人の森

高田 実希 / Miki Takata

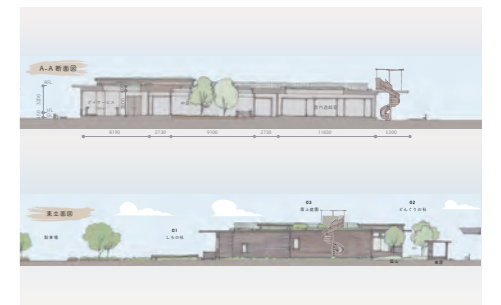
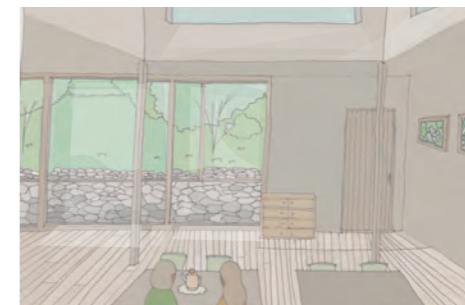
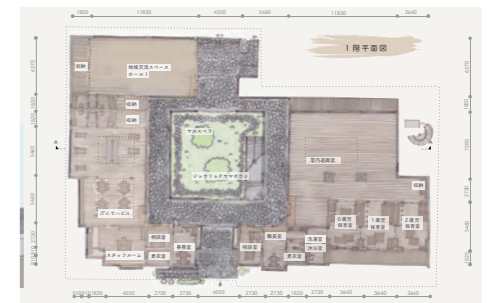
地域に根ざした、多世代間の交流を生むことのできる幼老複合施設を設計するにあたり、この施設を利用する人だけでなく、その地域に住む人とも交流が生まれるような空間づくりを目指しました。建物の床を30センチ上げて腰掛けることを可能にしたことで、ちょっとした時間潰しなどにも訪れやすい場所にしました。また、各棟を大屋根で繋ぎ、それにより生まれる屋根下スペースをあちこちに設けることで、多世代間の交流の場とすることを可能にしました。さらに、施設利用者が製作したアート作品を展示するスペースを設け、製作者と観賞者の交流を促せる場としました。地域と人々が関わり合いながら地域の集会所として活性化することを期待します。



## はぐくみの里

橋本 七海 / Nanami Hashimoto

「光と庭が交錯する複合施設」を全体のコンセプトとして、トップライトにより明るく開放感のある空間を施設利用者に提供し、各部屋が中庭を囲むような配置によりデイサービス・保育園・地域交流スペースの賑やかさを緩和しつつ視線が繋がり、交流が自然に行われる施設を目指した。3つの部屋を1つの建物に配置することで、一体感のある空間を作り、内部の中庭に意識が向くように計画した。そして、敷地の北側の庭は複合施設と既存施設の繋がり場とし、周辺の施設利用者及び職員の休憩・交流スペースを設けている。南側には園庭・駐車場を設けて間に植栽を配置し、施設の屋上には庭園を作ることで経年変化を楽しめる外観とした。





## まわり、めぐる学び舎

八杉 凧咲 / Nagisa Yasugi

小学校は、6年間通う子供たちの場所であると共に、保護者や地域の方向士など、様々な交流の場所になると考える。そこで私は、子供たちにとって「6年間のワンダーフォーゲル」のような場所となり、「地域に向き合い、交流を広げる」小学校を目指した。北に山々、南は道路に面し静と動の雰囲気を持つ敷地に合わせて、教室や地域交流の場を配置し、様々な外部空間を全体に散らばせた。内部に関しては、階段の踊り場の高さを変え、学年ごとに変化する空間を設けるなどの工夫を凝らした。敷地を一杯利用しながら、新たな発見や交流が生まれる空間を作ること、子供たちにとっても地域の人たちにとっても、充実し続ける小学校になると考える。



## 小学校公園化計画

渡辺 珠羽 / Miu Watanabe

子どもたちは自然豊かな公園で遊ぶことで、他者との関わり方や命の大切さを無意識に学んでいる。そこで、公園で生まれる学びと学問の学びを関連させ、メディアセンターを中心とした小学校を提案する。昇降口から教室に行く動線上にあるメディアセンターでは、学年の垣根を超えた交流が生まれる。子どもたちは他学年との関わり方や上級生から目指すべき姿を学ぶ。また、各教室の前にも本棚が置かれ、子どもたちは日常の不思議を発見へと変える習慣を身につける。建物は敷地に沿った形で配置し、直線と曲線を交えた形で空間の奥行きを操作した。体育館を半分地下に埋めることで、山と建築の間を抜ける風が木々を揺らし、心地よい空間を生み出した。



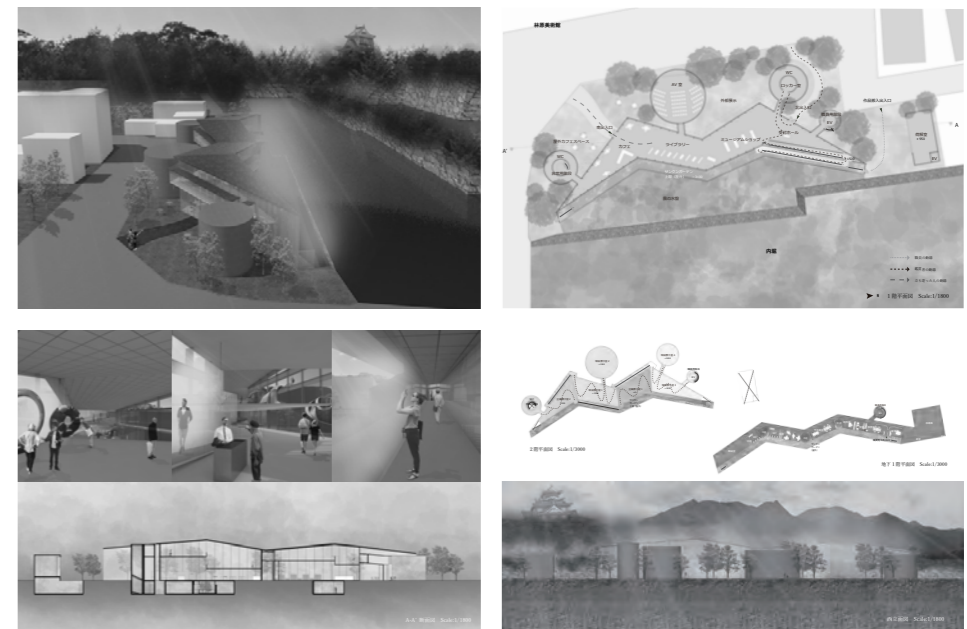
小学校は、児童に対して学習への動機づけや興味を促す環境を用意する場所であると共に、多様な目的にも対応できる必要がある。最近では、ハード面のみならず、ソフト面での見直しも重要視され、両者を綿密に関連付けた新しい学校のあり方も模索されている。本課題では、これからの小学校に望まれる教育環境のあり方を各自の自由な発想によって、楽しい夢のある計画と図面表現にすることが求められる。

## 透明の境界

寺田 彩夏 / Ayaka Terada

敷地は西に林原美術館をはじめとした「街に開けた空間」と東に岡山城の水堀や木々など「自然に開けた空間」を併せ持つ「二面性のある場所」である。本設計ではこの2つの空間を分断・透明につなぐことで再構築するというコンセプトの下、「透明の美術館」を提案した。敷地に沿って長細く配置した展示室をガラス張りにし収蔵庫や事務室などケの空間をガラス張り空間外に配置することでその透明性を高める。さらに水盤から噴射する霧によって東西に流れる空気を緩やかに繋いでいく。またステップフロアの展示室を外壁に沿って配置されたスロープに沿って巡ることで、東西の景色や霧の流れを感じながら鑑賞することができる美術館となっている。

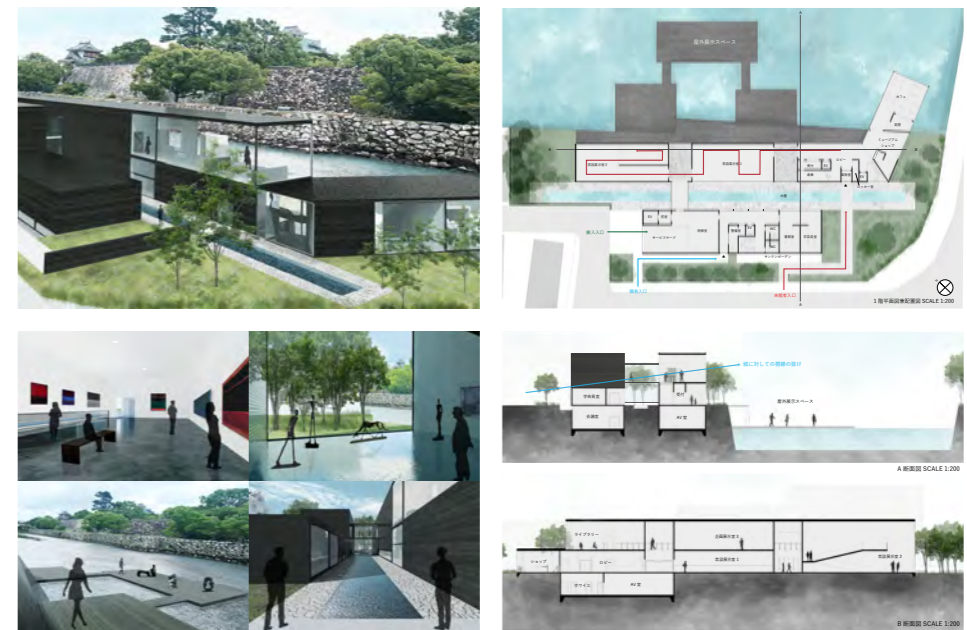
計画地は、西側に前川園設計の林原美術館、東側には堀越しに岡山城の天守閣を望む細長い敷地である。近代の建築である林原美術館、400年以上の時を刻む堀と石垣に囲われた岡山城、この二つの領域の境界線上に計画地は存在する。ここでいう境界とは、物理的なものであるだけでなく、光や空気、風のように時々刻々と移り変わるのかもしれない。そんな場所で、心静かに芸術作品に向かい合える美術館のデザインを求める。



## 風景と過ごす美術館

中井 花玲 / Karen Nakai

この美術館は、西側に林原美術館、東側に岡山城がある二つの領域の境界線上の敷地に行む。400年以上の時を刻む岡山城の傍らで、同じく何百年の時を経て受け継がれてきた展示作品を、その風景と共に鑑賞することで、日常を忘れ穏やかな気持ちで作品に没頭できよう美術館を目指した。敷地形状に沿うように細長いボリュームを分棟配置し、ガラス張りの透明なブリッジで繋ぐことで、その間を流れる水盤も移動がてらに鑑賞できる。また前面道路に対しての圧迫感を減らすため、手前のボリュームの高さを極端に抑え、その先にガラス張りのラウンジを設けることで、館内にいる人々のみならず、街行く人々も天守閣が望めるように設計した。



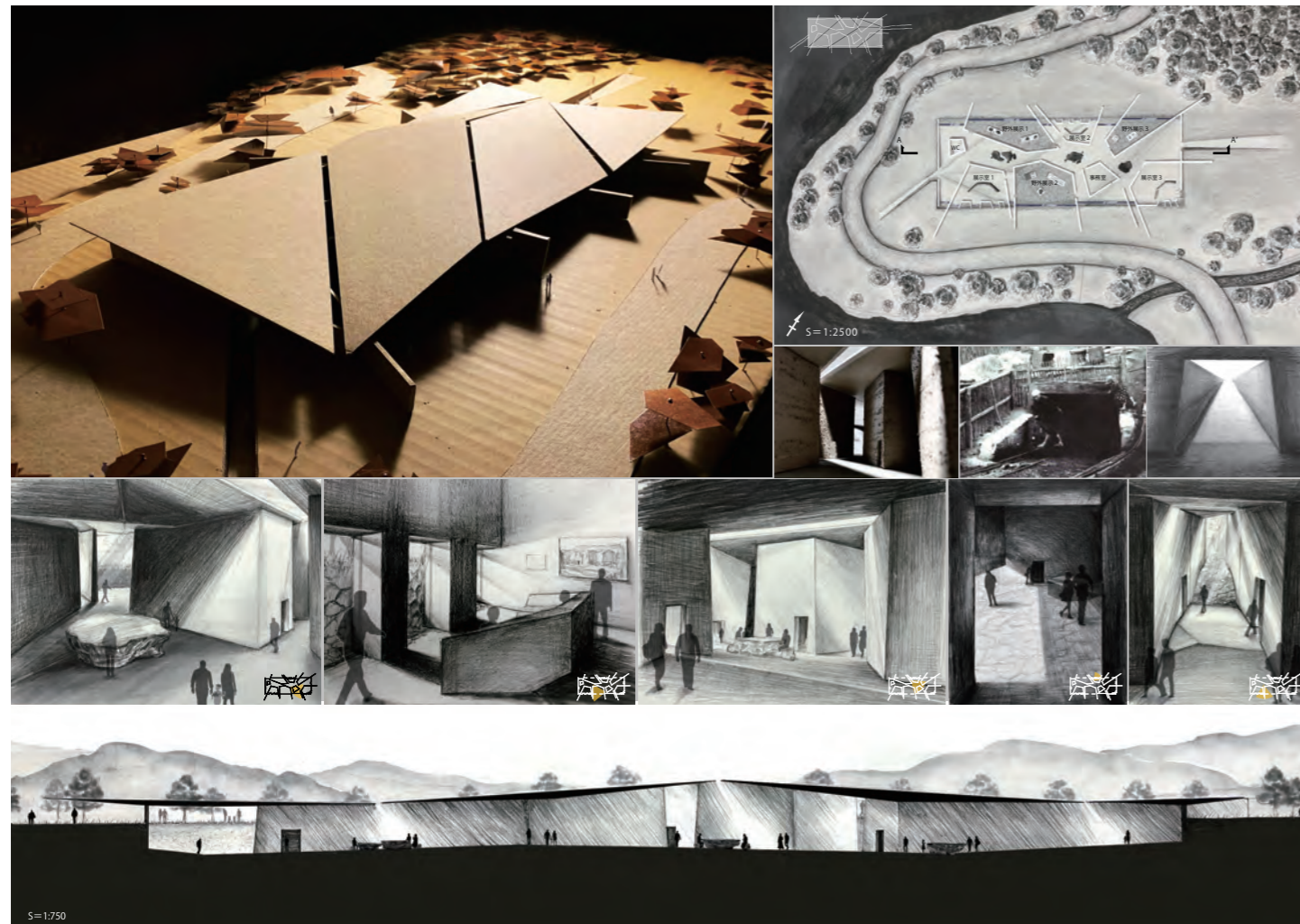


# 大地との対話 - 炭鉱町宇部を支えた風景の記憶の継承 -

沖ノ山炭鉱における炭鉱住宅地区の形成機構について

地主 彩乃 Jinushi Ayano 向山 徹研究室

宇部の町は、炭鉱から始まった。かつて、豊かな炭層が海底に広がっていた宇部は、炭鉱業が興隆する。海底炭鉱への坑口周辺に町が寄り集まり、炭鉱で働く人々の住宅も肩を寄せ合うように軒を連ねた。海底へと坑道を掘り進め、炭層を掘削し石炭を採集する作業。厳しい作業環境の中、宇部を支えてきた鉱夫たちとその家族。近代化を支えた石炭と彼らを中心として、宇部の町がはじまり、しかし盛衰を経て坑道は埋め立てられ、そして立ち並ぶ寄棟屋根の住宅群は姿を消した。海底炭鉱、炭層、坑道、坑口、掘削、炭鉱住宅の連なり、当時を象徴する言葉と記憶の断片を。今は姿を消した炭鉱町宇部を支えた炭鉱労働者たちの軌跡が時を経て、現代に建築として形を残す。今につながる炭鉱の記憶を想起させるような建築の提案を行う。



# シバウジ・ベース ~2年後から始まる僕の村づくり計画~

西陣織工房再生計画

芝氏大輝 Shibauji Daiki 吉田 豊研究室

芝氏家は高祖父の代から、京都の伝統産業である西陣織を営んでいたが、1980年代以降、需要の減少を理由に西陣織産業を撤退した。当時、利用されていた工房は京都市西陣に位置する芝氏家本家の一部に1か所と京都市京北の弓削川沿いに1か所存在し、現在では芝氏家本家の工房は倉庫となり、京北の工房は倉庫兼、祖父の農業の拠点となっている。現在使われなくなってしまった京都市京北の西陣織の工房を復活させ、敷地全体を体験から交流を生む場の提案をすると同時に、この土地を受け継いだ未来の僕がこの場所で楽しい生活を送るための場所を提案する。



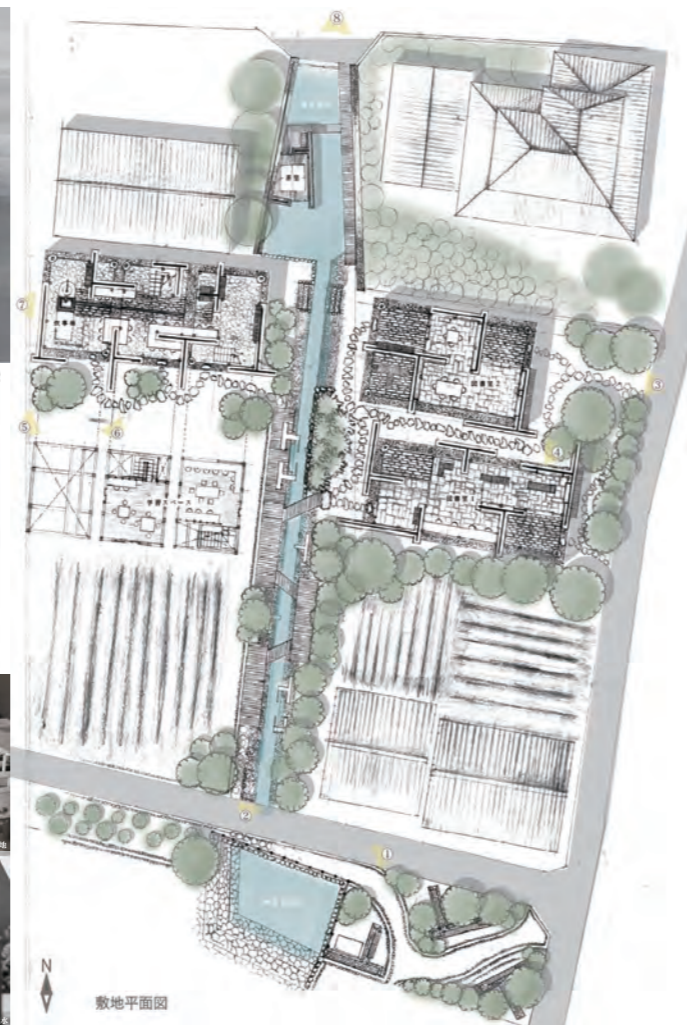
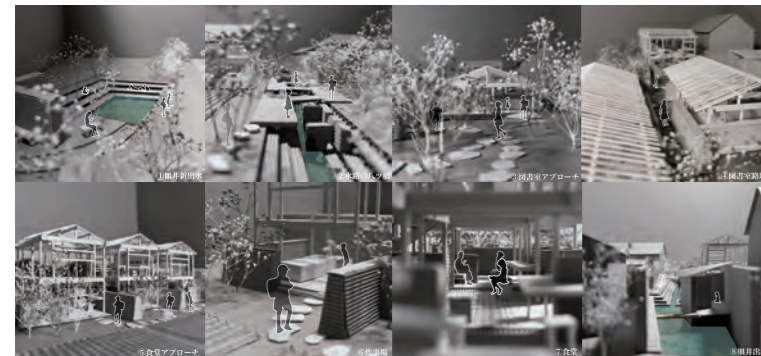
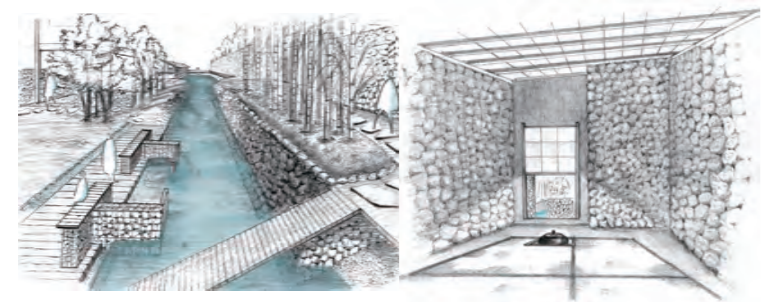


# 巡る庭 -湧水と人々を紡ぎ育てること-

香東川流域における太田南地区の出水について

柴野 沙彩 Shibano Saya 向山 徹研究室

香川県高松市太田南地区には、古くから『出水』と呼ばれる湧水が人々の生活を支えてきた。しかし、宅地化や水不足の解消にともない出水と人との関わりが希薄になりつつある。そこで生まれる3つの問題点(「荒廃による危険性」、「人々の意識の希薄化」、「舗装による湧出量の変化」)を改善しながら、再び人々が寄り添い、この場所を守り、育てていくことを本設計の目的とする。出水、水路、空き家の様々な視点での「滞留」を見直し、改修を行うことによって断面的な循環を描いていく。「降る、湧く、溜める、流す、浸透する、蒸散する」様々な水の移り変わりが人々の生活に潤いと清らかさを添え、人々が水に寄り添い、育み、生き物たちも息を吹き返し、未来の子どもたちへの贈り物が永続的に紡がれてゆく場を目指す。



# 水のみち・人のみち 山形五堰の再生と新拠点の提案

親水空間の整備に伴う景観と活用に関する研究

田中 日菜 Tanaka Hina 吉田 豊研究室

山形県山形市を流れる山形五堰は江戸時代初期につくられ、生活するうえで欠かせないライフラインとして存在してきた。しかし、昭和頃から進められた都市化により、水路はその姿を大きく変えてきた。近年、水路の重要性が見直され、山形市では積極的に水路を活用していこうとする機運が高まっている。しかし、五堰を利用した親水空間や山形五堰の歴史に関する情報発信の少なさ、それに伴う観光資源としての機能不全、親水空間の未活用といった問題点も指摘されている。そこで、山形城からいくつかの文化施設、親水空間をつなぐ水路を水の道とし、その終着点に山形五堰の歴史を伝える展示空間、山形の魅力を味わうシェアキッチンやカフェ機能を含めた新たな水の拠点を提案する。



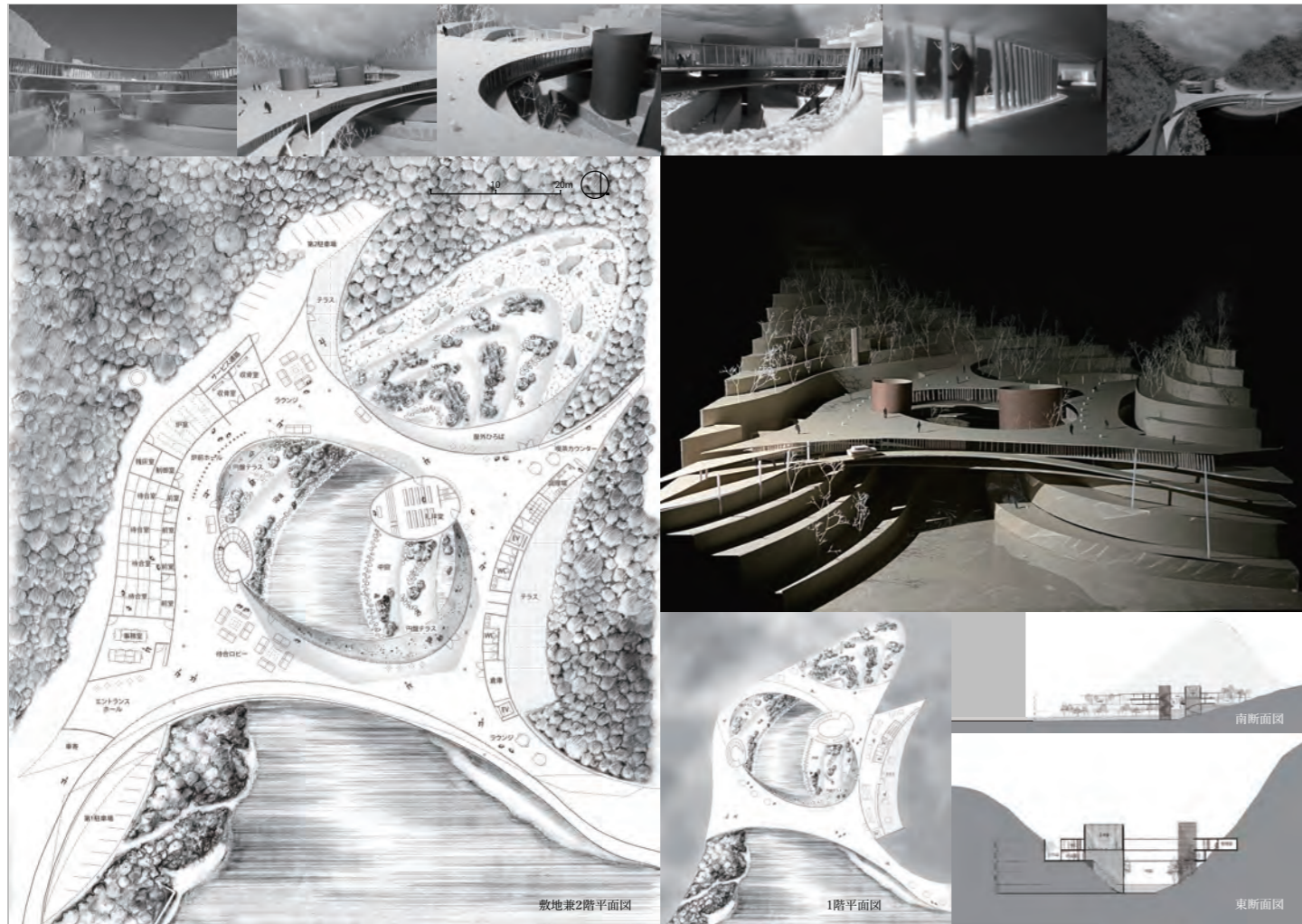


## 送ること、迎えること -天と地の境界線としての火葬場施設計画-

旧備前市における煉瓦造煙突の形態に関する研究

森本 千聖 Morimoto Chise 向山 徹研究室

煉瓦造煙突の建ち並ぶ岡山県備前市の煙突は、伝統的な焼物を生成する設備として耐火と耐水という機能的な側面を持ち、意匠的にも美しい街並みの一部となっている。調査から、ここの住民は備前の土や山や川の恩恵を受けて作られた備前焼から収入を得て、食事をする生活を送っている。大きな一つの輪のような生と死がいつまでも循環する。住民はこの循環を理解しているからこそ、かえりたいと思ひ、必然だと思うのだ。だからこそ、いつかはこの備前にかえる、そんな場所をつくった。故郷へ戻りたくなる気持ちを誘発し、この地にいつまでも循環し、今を生きる人のこのころの一部になれる、備前本来の自然や煉瓦造煙突の形を生かした大地と一体になれる火葬場施設を提案する。

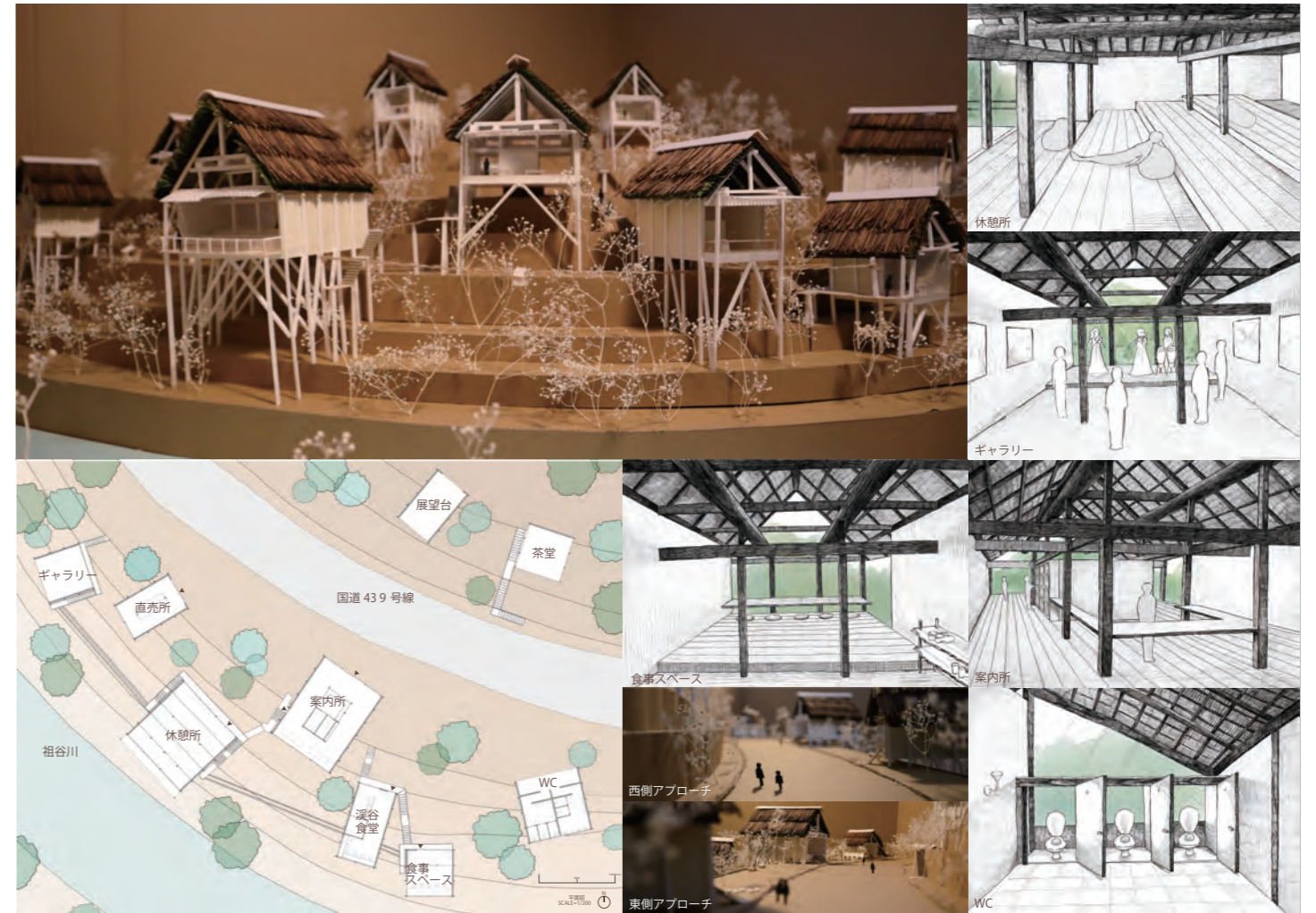


## 歩く人のための渓谷秘境駅

秘境の文化財をめぐる旅人へ向けた拠点的空間

山川 千尋 Yamakawa Chihiro 福濱 嘉宏研究室

徳島県には、日本三大秘境のひとつ『祖谷』があります。険しい山々に囲まれ美しい景色が広がり、古くからの祖谷の暮らしを伝える貴重な文化財も多く残されています。東祖谷にある重要文化財小采家住宅では、18世紀頃の民家で多く用いられた構法『コキバシラ・オトシコミ構法』が使われています。実際に訪れてみると、丁寧に加工された部材の一つ一つから建築当時の大工や職人たちの思いを感じました。現在の祖谷は急速に過疎化が進んでおり、このままでは忘れられてしまう文化財がたくさんあります。それらを繋げ、歩いて巡るための拠点的空間を提案します。



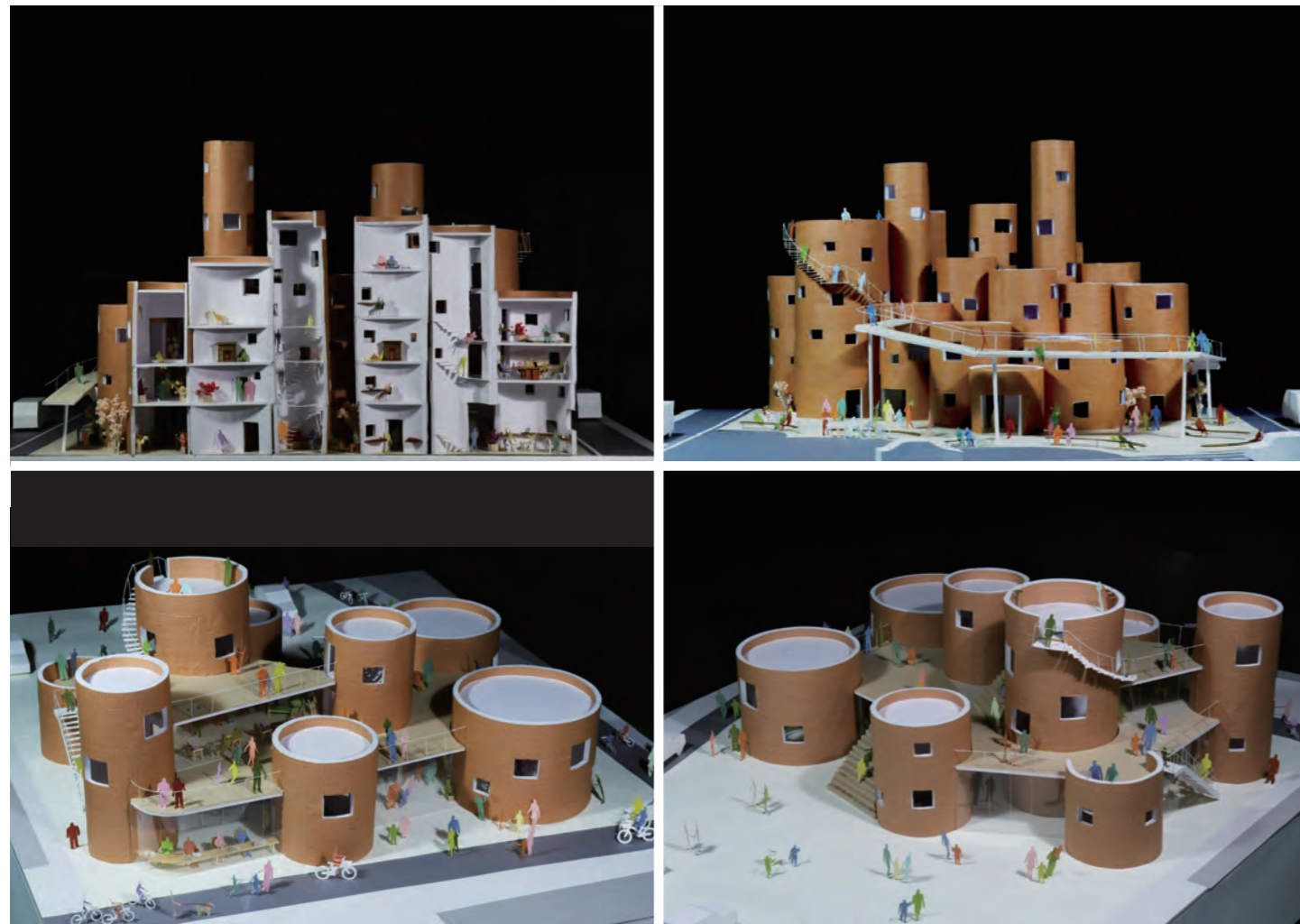


# 街と暮らす塔の日常 一脱避難タワー、みんなから愛される津波避難施設の提案一

防災津波避難施設

山本 充 Yamamoto Mitsuru 吉田 豊研究室

“非日常を日常に” 地震という非日常的な状況に陥った際、果たしてどれだけの人が避難タワーという普段から閉ざされた非日常的な場所に足を運ぶのだろうか。必ず起きるとされている南海トラフ巨大地震に備えて避難タワーという非日常的な場から日常の場として考え方を考えることが重要である。防災機能に限らず、インフラ機能とコミュニティハブとしての役割、避難施設としてのシンボリック性を付加し、串本という街に開かれた避難施設を計画することで、災害という非日常を日常の中に介入させることを目的とする。

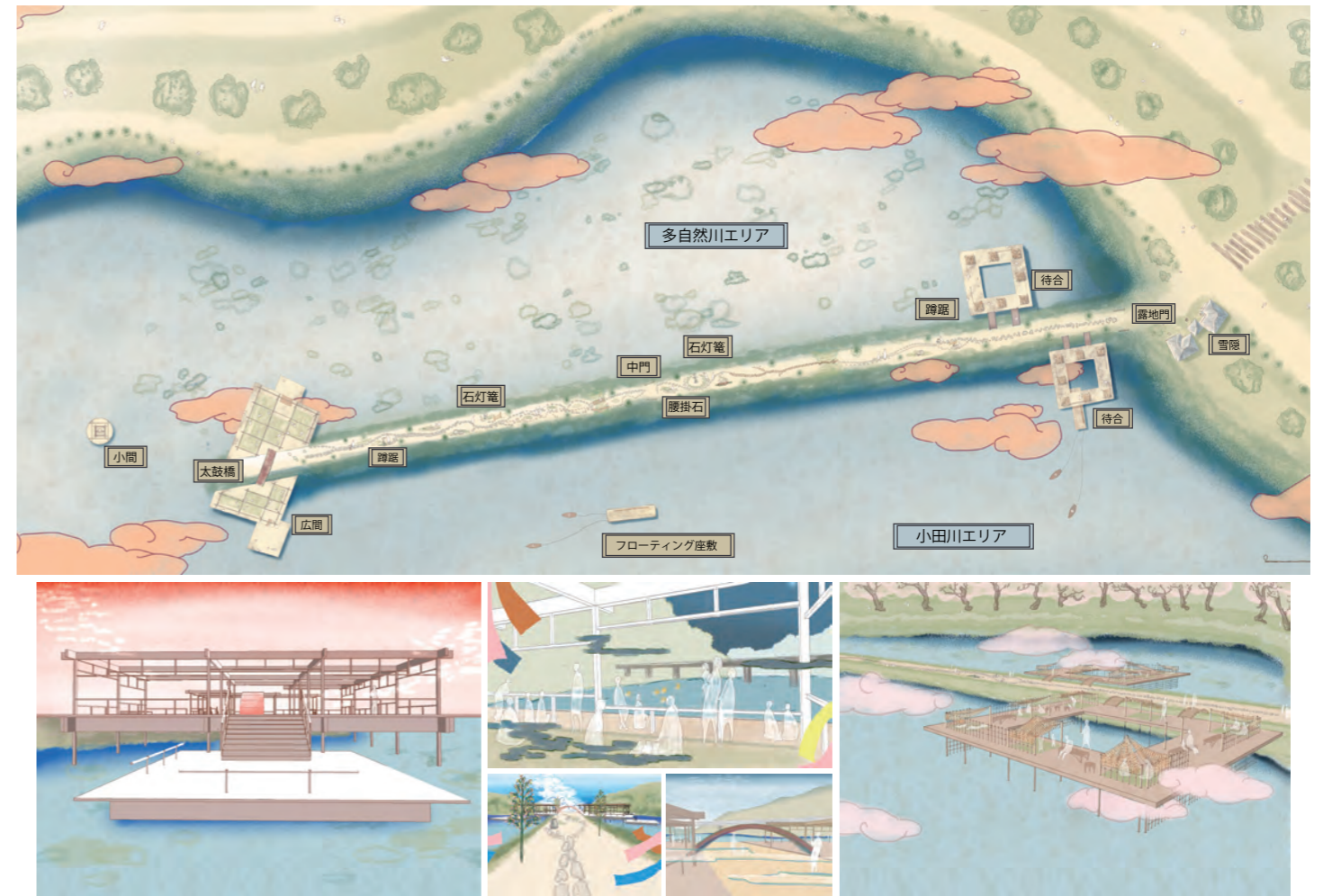


# 浮遊する茶室 水に祈る 献茶と灯籠

岡山の茶室

安田 有喜 Yasuda Yuki 福濱 嘉宏研究室

新しく小田川に生まれ変わる場所に、慰霊の場をつくる。災害とどう付き合っていくか。文明がどのように進化しても自然災害をコントロールすることはできない。そこで、水に抵抗しない、浮遊するシステムを設計に取り入れた。また、岡山にある文化として吉備津の茶祖・栄西、児島の小田原三茶人・野崎幻庵、玉島の茶室群、吉備中央町の作庭師・重森三玲などがあげられる。慰霊と茶の湯をかけ合わせた、地域特有の七夕祭を興したい。奇しくも七夕に起こった災害。誰もが「予期せぬ」「未曾有の」出来事だった。人だけではない、ものだったり、誰かの大事なことだったり、想い、記憶、縁…さまざまなものが流された日だった。失われたものを惜しむ心、終わったこととして忘れてしまいたくない想い、今ある平和が続くことへの切望を短冊に乗せて、灯籠に乗せて救いたい。





## Borderless - 境界のあり方から考える児童養護施設 -

児童養護施設の運営方針に応じた生活環境の実態に関する研究 - 岡山県を対象として -

小林 弘樹 Kobayashi Hiroki 梶 和宏研究室

児童養護施設では、家庭的な養育の推進により、各施設は施設改変が求められている。こうしたなか、施設に対する認知度や理解度は低く、マイナスなイメージが大きい。そうした理由により地域住民に反対されグループホームの整備が思うように進まないといった事例もあった。また小規模化や地域分散化に伴い、物理的にホーム間の距離ができることで起こる「ホームの孤立化」も問題視されていた。このことから、今後の施設改変時には、施設の状態に合わせ、「施設と地域」、「ホームと非居住空間」、「本園とグループホーム」の程良い距離感や関係性を考えていく必要があるだろう。そこで、これらの境界のあり方から考えた改変計画を提案したい。修士論文で得た知見から、これからの児童養護施設のあり方を示すことを目指し、ケーススタディを行なった。



## 縁路 (yorimichi)

地方都市における橋上駅「駅裏」「駅表」空間に関する研究

田中 智 Tanaka Satoshi 西川 博美研究室

数百年の歴史を持つ水間寺は、水間鉄道と街双方にとっても重要な地域資源であるはずだ。そのイメージを沿線全体に広げることを目指し、駅前交流施設のデザインを検討した。水間寺には聖観世音が出現したとされる滝があり、龍にまつわる神話が語り継がれている。また寺社建築にみられる木造で生み出される曲線もイメージを形成する要素と考え、これらを建築の形態と動線に取り入れた。この建物は高さの異なる柱の連続によって優美な曲面の屋根を形成している。前面道路に対しては高く開き、駅空間でありながらも地域住民を受け入れ包み込む。そうしてできた軒下空間が人々を名越駅のホームまで導く。この建築を通して人々の多様な活動や交流が生まれることが期待され、地方路線における鉄道駅の在り方の一例を示すこととなるはずである。





# 風の道しるべ

炭酸カルシウム乾燥小屋に関する研究

橋本 拓磨 Hashimoto Takuma 向山 徹研究室

日本の地場産業の発展に大きな役割を果たしてきた乾燥小屋は近年その多くが失われた。中でも炭酸カルシウムを扱った乾燥小屋の研究は行われていない。本研究では乾燥小屋が環境共生という今日の建築的課題の解決に繋がる空間をもつことをデザインの観点から明らかにしていく。制作は炭酸カルシウム乾燥小屋の形態を継承し、全国各地に点在する“風穴”を環境設備として組み込んだ複合施設の設計を行う。サウナや外気浴などを取り入れ、地域の歴史的価値をもつ“絹”を空間的分節“泉水”を水風呂、冷蔵機能を担うことで、環境共生に寄与する建築となっている。風と建築が一体となった空間は、土地の記憶を呼び戻すように地域の歴史的価値を一本一本紡いでいき全体を構成していく。風がこれからの建築の指標を導く道しるべとなるであろう。



# OKAYAMA PREFECTURAL UNIVERSITY GRADUATION WORKS EXHIBITION 2023

『岡山県立大学デザイン学部デザイン学研究科 卒業・修了制作展』が、2/28 tue-3/5 sun、天神山文化プラザにて開催された。建築・都市デザイン領域から17点、修士作品3点が展示された。今年の卒業・修了制作展のテーマは「Re:build」。rebuildは「再建する」と言う意味を持つ単語で、コロナ禍で減退した様々なものの再起、Re: はメールなどでの返信や返答の意味を持ちます。コロナが蔓延しだしてから多くのことを社会から問われ続けた大学生活を経て導いた自分なりの返答を、集大成となる最後の制作物を「築き上げる」(build)によってその解答を表現する。3年ぶりの一般公開となり、より多くの人に学生たちの想いのこもった作品を届けることができたのではないだろうか。

(右: メインビジュアルは造形デザイン学科岡野千優さんのデザイン)



Website (ウェブ展示)



Instagram (制作風景)

← 建築・都市デザイン領域展示風景

ウェブ展示→





# 建築サロン



## Origin

学年を跨いだ上下の繋がりをつくりたい！  
建築学科ならではの活動に取り組みたい！  
他大学や高校生にも県大の建築学科を知ってもらいたい！

## Information

	1年	2年	3年	4年
幹事	谷岡優希 土橋璃央奈 本行千夏 森岡輝成 森安野土香	安食翔太 上田なつめ 太田実里 川上皓照	八杉風咲 渡辺珠羽	馬野菜由 小本悠輔 柴野沙彩 濱野颯良

>>> 2021年5月 設立

建築サロンには建築学科の学生全員が所属している。その中から各学年数人が幹事メンバーとなり、さまざまなイベントの企画や運営を行っている。活動に参加するのは幹事メンバーのみではなく、建築学生全員である。

# ワンデーエクササイズ 2022

## 概要

現在、岡山市役所は建て替え計画が進んでおり、南側の「大供公園」を中心としたエリアに新たな岡山市のランドマークとなる新市役所が建設される予定である。  
敷地は現在の岡山市役所跡地。  
岡山市役所のあった場所に、子供から老人まで多くの人が集い、一体感をもって過ごせる場所の提案が求められる。  
「産官学連携」つまり、市役所（行政）も、市民も、学生（学校）も、みんなで連携して、人々が集い「One Team」になれる仕掛けができる建築の提案が期待される。

ワンデーエクササイズとは、岡山県内の建築学生を対象としたアイデアコンペである。建築サロンで参加者を募るイベントを行い、今年度は3年生7名、2年生17名、1年生14名の計38名が参加した。  
学年を跨いだ3チームに分かれ、約3ヶ月間制作に取り組んだ。

## 敷地



## Salon activity record 2022

4月 5月 7月 1月 2月

<p><b>4/11</b> 履修登録説明会</p> <p>新入生を対象に履修登録の方法や、授業内容などを先輩がレクチャーした</p>	<p><b>5/21</b> 新入生オリエンテーション</p> <p>引率学生として幹事メンバーから数名が参加した</p>	<p><b>7/11-10/22</b> ワンデーエクササイズ</p> <p>参加者全体を取りまとめ、チーム決めや中間発表などを行った</p>	<p><b>1/25</b> 球技大会：バレー</p> <p>寒さや日没時刻を考慮し、第二回は室内競技を行った。</p>	<p><b>2/16</b> 講評会</p> <p>外部の建築家を招待し、設計課題成績優秀者による講評会を行った</p>
	<p><b>5/11</b> 球技大会：サッカー</p> <p>1年生から院生、教員までが参加する初のイベントを行った</p>	<p><b>7/11</b> コンペ・ポートフォリオ説明会</p>	<p><b>1/17</b> ワンデー反省会</p> <p>来年度の活動に繋げるため、今年度のよかった点や失敗を共有した</p>	

**Team A** 千変万化 “何もない広場” だからこそ人がつながる空間づくり 学会奨励賞 / OKC 賞

**Team B** 寄り添い、育てる - 地域で育てる子どもたち - 優秀賞

**Team C** フードネット - 食からのアプローチで健康に - 優秀賞





# 講評会

2023.02.16 WED @7206

presents

Miu Watanabe  
Shota Ajiki

Minori Ota  
Nanami Hashimoto  
Sakiko Shigeoka  
Miki Takata

Nagisa Yasugi  
Miu Watanabe  
Ayaka Terada  
Karen Nakai



## Guest



神家昭雄建築設計室

### 神家昭雄

1953 岡山市生まれ  
1974 国立明石工業高等専門学校  
建築学科 卒業  
1987 PLUS 建築研究所設立  
1994 神家昭雄建築研究室に改称  
国立明石工業高等専門学校建築学科  
武庫川女子大学建築学科 非常勤講師



ココロエー級建築士事務所

### 片岡八重子

1974 千葉県出身  
1995 青山学院女子短期大学卒業  
スターツ株式会社勤務  
2000 東京理科大学工学部2部建築学科編入学  
2002 東京理科大学工学部大月研究室所属  
2003 岡村泰之建築設計事務所勤務  
2008 ココロエ設立  
2015 岡山理科大学工学部建築学科非常勤講師

## 講評会開催にあたって

学年末に建築サロン主催で開催された講評会。学生主体でのゲストをお招きする講評会は初の試みである。

普段は同じ学年の作品を見て、エスキースを重ねた先生に講評をしていただくだけの学生たちにとって、他学年の作品や発表を見ることや作品を初めて見る外部の建築家に講評していただくことで得られる **何か** を求めて、今回の講評会は開催された。主催者としては、上級生は下級生に刺激をもらい、下級生は上級生に技術を学ぶ良い機会になることを望んでいる。また、今回発表できなかった子には、次回は優秀者選ばれて発表したいと思ってもらえるような会になることが望ましい。今回の講評会で発表の舞台に立ったのは、前期建築設計演習において成績優秀者に選出された学部2、3年生計8名である。

## レクチャー

ゲストには建築家、神家昭雄さんと片岡八重子さんをお招きし、1時間程度のレクチャーをしていただいた。

神家さんからは日本建築における中間領域の在り方や、さりげないデザインがもたらす効果、それに気がつくためには常にアンテナを張ることが大切だということを教えていただいた。片岡さんからは住宅に当たり前が存在する空間の必要性といった、新築・リフォームの設計に関するお話だけでなく、建てた後の建築とまちとの関わり方についても教えていただいた。

御二方には **実測を大切にしている** という共通点があり、これから設計を学ぶ学生にとって、良い建築設計を紐解くヒントになったのではないだろうか。わずかな時間ではあったが、参加者はとても有意義な時間を過ごしたことだろう。

## 講評

今回の講評会では、2年生は住宅と保育園、3年生は小学校と美術館をプレゼンした。2年生は主に図面表現・設計技法・周辺環境と建築形態のあり方といった、さまざまな角度からの講評をいただいた。神家さん、片岡さん共に数多くの住宅設計を経験されているため、指導につい熱が入ってしまう場面も見られた。しかしながら、優秀者ということもあり、2年生前期にはよくできていると褒められていた印象だ。3年生は全体的に断面計画にまで目を向けた設計ができている点を評価していただいた。とは言いつつも、配置計画に方角への配慮が足りない点や、建築用途に合わせた形態操作についてなど、まだまだ課題も挙げられた。表現方法も手描きとデジタルがあり、それぞれの良さを感じられたのではないだろうか。

## 講評会を終えて

講評会終了後、参加した学生が発表者の作品を撮影する姿が見られた。学生は授業で習う知識や技術で満足してはいけな。特に表現技法については、授業では基礎的な部分しか教わらないため、自ら学ぶ姿勢が大切になってくる。独学で学ぶのも一つの手だが、このような機会を利用して先輩や後輩から表現を学び、ぜひ引き出しを増やして欲しい。また、今回はあまり見ることができなかったが、作品を通して学年を跨いだ交流が生まれ、お互いに成長できる関係がこの場で生まれていくことを今後に期待する。参加者からは、**楽しかった**や**勉強になった**という声を聞くことができ、たくさんの反省点はありながらも次回開催に繋がる大きな第一歩になったのではないだろうか。



## 編集メンバー

制作は初めてのことばかりで  
とても勉強になりました！  
これ以降もこの冊子が  
続いて行って欲しいです



4年 柴野沙彩



3年 渡辺珠羽

多くの方にご協力いただき、  
無事に完成させることができました  
感謝でいっぱいです！  
みなさんの喜ぶ顔が見れたら嬉しいです

冊子を作る大変さを肌で感じました  
次の冊子ではもっともっと  
力になれるように頑張ります！



2年 上田なつめ



2年 川上皓照

冊子を作りながら1年を振り返るのは  
面白かったです！  
来年度も楽しい思い出がたくさん  
出来るような年にしたいです

## 教員一覧

津田 勢太 Seita Tsuda  
教授〈学科長〉  
建築構造

福濱 嘉宏 Yoshihiro Hukuhama  
教授〈学部長補佐〉  
日本建築史 建築構法計画

向山 徹 Toru Mukouyama  
教授  
建築設計、建築歴史・意匠、建築計画

吉田 豊 Yutaka Yoshida  
教授  
建築設計、建築意匠、建築史（近代西洋）

西川 博美 Hiromi Nishikawa  
准教授  
建築設計・都市史（主に台湾）・保存・再生・まちづくり

河合 大介 Daisuke Kawai  
准教授  
美学・美術史

穂苅 耕介 Kosuke Hokari  
准教授  
都市・地域の保全・再編、まちづくり

岡北 一孝 Ikko Okakita  
准教授  
西洋建築史、建築の保存・再生

畠 和宏 Kazuhiro Hata  
准教授  
建築計画、建築設計

原田 和典 Kazunori Harada  
助教  
建築環境工学、建築音響

## 編集後記

初めての発行となる岡山県立大学建築学科の  
機関紙「KEN KEN」を  
ご覧いただきありがとうございます。

今回の編集部は結成されたばかりで、  
未経験者も多くつたない部分もありましたが、  
力を合わせて作り上げました。

2021年学科再編にともない“建築学科”となり、  
同時に建築学生全員を構成員とする  
“県大建築サロン”を立ち上げました。  
これらの出来事から、  
より建築領域は活気に満ちたと感じます。

これを機に、学生たちの活動の記録を  
残していきたいという思いで  
本冊子を制作しました。

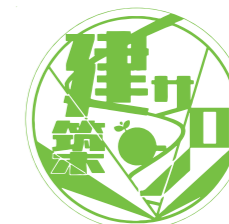
この冊子によって、  
学生の活動をより多くの人に知ってもらい、  
また、学生自身の活力となることを願っています。

「KEN KEN」制作にあたり、  
ご協力いただいた皆さまに感謝と敬意の意を表します。

編集メンバー一同

OPU Architectural Review 2022

# KEN KEN



↑ 2年 太田実里さんのデザイン



Instagramでも  
学生の活動記録を  
ご覧ください！

岡山県立大学  
デザイン学部建築学科  
機関紙 KENKEN vol.1  
2023年3月発行 非売品

編集：岡山県立大学  
デザイン学部 建築学科  
建築サロン 機関紙編集委員

発行：岡山県立大学  
デザイン学部 建築学科  
〒719-1197 岡山県総社市窪木 111  
TEL：0866-94-2111 FAX：0866-94-2196  
URL：<https://www.oka-pu.ac.jp>

印刷：株式会社グラフィック  
URL：<https://www.graphic.jp>